人の血　鬼の血

かにかまとかにたま

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遊郭編で暴れ始めた禰豆子が、血を飲むことで自我を取り戻し、自らの意思で戦いに参加するｉｆストーリーです。

アニメ最新話の内容を含みます。先にご視聴ください。

目次

遊郭編
一話 …… 1
二話 …… 10
三話 …… 20
四話 …… 26
鬼殺隊隊士　竈門禰豆子編
五話 …… 42

遊郭編

一話

「伊之助、急げ！」
「俺様の前を走るんじゃねぇ！つーか起きてたのかよ！おい待ちやがれ！」
先程まで後ろを走っていた善逸が、血相を変えて飛び出す。
耳が良い彼には、悲鳴に混じって、ある叫び声が聞こえてきた。

『だめだ！禰豆子！』
『ガァァァアアッ！』
「炭治郎の声がした、禰豆子ちゃんも一緒だ！」
「二人だけか!?先に向かった祭りの神は!?鬼は!?」
「分からない、とにかくこっちだ！」
「答えろよオイ！」
「静かにしてくれ、聞こえないだろ！」

近づくにつれて、声の内容が鮮明になっていく。
『グガァァァァァ！』
『ごめんな禰豆子、戦わせて』
『痛かったな、苦しかったな、ごめん』
『でももう大丈夫だ、兄ちゃんが守るから、だから眠るんだ禰豆子！禰豆っ――』
バキバキッ！と大きな音がして、声が途切れる。
「何が起こってんのか俺にも教えろ！お前の耳貸しやがれ！」
「この先の通りだ！」
二人は屋根を飛び降りた。
そこにいたのは、体のひとまわり大きい鬼を組み伏せる炭治郎だった。
「炭治郎！禰豆子ちゃんどうしちゃったんだよ！」
駆け寄る二人を見て、炭治郎が叫ぶ。
「近づくな！危険なんだ、頼む！」
「禰豆子、あの二人のこともわかるだろう？お兄ちゃんといっしょにお前を守ってくれる優しい仲間だ、落ち着いてくれ、眠って休むんだ！禰豆子！」
しかし、禰豆子は暴れ続け、ついに炭治郎を突き飛ばした。ゆらりと立ち上がり、二人の方を向く。

「クソ、どうすりゃいい！オイ！ねず公！親分に逆らうんじゃねぇ！」
「禰豆子ちゃんに刀向けるなよぉ！」
「駄目だ二人とも、禰豆子は今危険なんだ！早く……」
理性を失った禰豆子が、二人に襲いかかる。
「グルルル……ガァァ！」
「禰豆子ちゃん！」
「俺様に任せろ！」
伊之助が刀を捨てて正面から受け止める。
「うおおッ！チカラつよっ！」
禰豆子が噛み付く素振りを見せると、すかさず引きつけて投げ飛ばした。
「あんまり乱暴にするなよ！」
「んな余裕ねぇ！」
二人がかりでなんとか押さえ込むところに、炭治郎が駆け寄る。その目には涙が滲んでいた。
「禰豆子、お願いだ……正気に戻ってくれ……」
「ガァァ！」
消え入りそうな声で呼びかけるが、反応は無い。

「禰豆子ちゃん、君は優しい鬼だ、人を襲ったりしない」
「禰豆子……頼む……」
「オイオイどうする、聞こえてねぇぞ！」
「炭治郎、何か方法は？」
「……わからない……禰豆子が鬼にされたあの日も、俺は励ますことしかできなくて……」
「ごめんな禰豆子、お前にはいつも、苦労をかけるばかりで……」
「ヴヴァァ！」
彼の呼びかけには答えず、唸り声だけがむなしく響く。
「炭治郎、場所を代わってくれ。伊之助もしっかり押さえてろ」
「……善逸？」
善逸は禰豆子の首の位置に向かった。膝立ちになり、鞘から刀を引き抜く。
月明かりに照らされて、稲妻の走る刀身がキラリと輝き、そして――

自らの左腕に刃をあてがい、引いた。
鮮血が禰豆子の口へと滴り落ちていく。
「禰豆子ちゃん、お腹が空いてるんだろ？あんまり多くはあげられないけど、これで少し

でも落ち着いてくれたらなって……」

禰豆子が血を飲んでいたのは、たった十秒ほどの間だったが、彼女の表情はうつろなままで、その場の時間の流れが止まったかのようだった。

血を飲み終えると、彼女はゆっくりと目を閉じた。大きくなっていた体格が少し縮んで、額に伸びていた角が消えていく。体に浮き出た模様も消え、そこで変化が止まった。

「もう大丈夫なのか？いつもの禰豆子ちゃんよりまだ少し大きいぞ？」

善逸が自分の左腕を止血しながら聞く。

「いや、これが本来の禰豆子だ、鬼になる前の……」

「オイ、離していいか？」

「……ああ」

押さえつけていた伊之助が離れ、３人で見守る。

すぐに禰豆子が目を開け、ゆっくりと上体を起こした。

「禰豆子、禰豆子！」

「……お兄ちゃん……」

「禰豆子！話せるのか？目が覚めたのか？」

「お兄ちゃん、わたし……」
額に手をあて、考え込むようなそぶりをする。すぐにその表情が変わり、恐怖に染まっていく。
「お兄ちゃん！みんなが！早く助けを呼ばないとーー」
「禰豆子……！」
炭治郎は耐えられず、禰豆子を強く抱きしめた。彼女は困惑した様子で辺りを見渡す。
「六太がいない……雪も消えてる……ここは……みんなは……？」
「もういないんだ、禰豆子。俺とお前以外は、みんな殺されてしまった」
「……そんな……」
禰豆子が、ずっと静かだった善逸と伊之助に気付く。
「黄色い人と猪の人……夢に出てきてた……」
「夢じゃないんだ、禰豆子。全部、現実なんだ」
彼女は無意識に口元を拭い、血が付いていることに気付く。口の中に広がっていた血の味に、不思議と不快感は無い。鋭く伸びた自分の爪を見て、その目に涙が溢れ出した。
「……夢じゃ……ない……そんな……どうして、そんな……！」
「禰豆子……」

突如、辺りに轟音が響き渡る。何かが爆発したようなその音を聞き、三人は次に為すべきことを思い出した。

「二人とも、宇髄さんに加勢してくれ！俺も禰豆子を避難させたらすぐに向かう！」
「任せとけ!!やっと暴れられるぜ!!ほら行くぞ!!」
「急に大声出すなよ！さっきまで珍しく静かだったのにさぁ！」
「あ、あの……！」
「（ええと、確か……）ゼンイツさん、イノスケさん、ですよね？お気をつけて……」
「おうよ！」
「もっ、もちろん！ありがと、禰豆子ちゃん！」
「禰豆子、こっちだ」
そして二組は、別々の方向へと駆け出した。

走りながら、炭治郎はどうするべきか悩んでいた。
禰豆子は今も箱に入れるだろうか？外に出したままでは守りきれない……かといっ

て離れてしまうと、また人を襲うかもしれない……

一方の禰豆子は、まばらな記憶によって混乱していた。鬼になってからの記憶はぼんやりとしていて、他人事のように感じてしまう。

「お兄ちゃん、ここはどこなの？街の中……？」

「ここは吉原だ、俺たちは鬼殺隊の任務でここに来た」

「任務……？……お兄ちゃん、その肩の怪我……」

崩れていない建物の中から人気（ひとけ）のないものを見つけると、彼は妹の手を引いて中へ入っていく。

「……禰豆子、お前はさっき人間を襲おうとした。覚えているか？」

「……ううん、わからない……」

「今、意識はハッキリとしているか？」

「……うん、でも――」

「いいか、絶対にここから動くな……後で必ず迎えに来る!!」

「待って！」

「俺が迎えに行くまで、他の人に近づくな。自分を強く保つんだ。俺は行かないければ」

「私も、連れていって……私も戦える……！」

「ダメだ!!ダメに決まっている!!お前は怪我をしたんだ、怪我をしすぎて暴れ始めた

……!!」

「これ以上、お前に怪我をさせるわけにはいかない……!!」

「私だって!!!!」

「私だって、お兄ちゃんに傷付いてほしくない!!戦ってなんかほしくない!!」

「……今はもう、たった一人の……たった一人の家族だから……」

「だからもう、離れ離れにはならない……もう二度と……!お兄ちゃんが戦うなら、私も戦う、戦える!!」

二話

禰豆子が自我を取り戻す前のこと……

「おいこれ竈門禰豆子じゃねーか、派手に鬼化が進んでやがる」

「兄貴のお前が妹を守らねぇでどうすんだ、普通兄弟ってのはそういうもんだろ」

宇髄のその言葉はもちろん、炭治郎に向けてのものである。しかしもう一人、それを聞いていた者がいた。

「ぐずり出すような馬鹿ガキは戦いの場にいらねぇ、地味に子守――」

言い切らないうちに、ただならぬ気配を感じて宇髄は振り返る。

直後、建物が崩れ落ちた。

「禰豆子！時間がない、走りながら説明するから聞いてくれ！」

「さっき善逸がお前に血をくれたから、今は一時的に理性を保てている。それでも、また

大きな怪我をしてしまったら、それを治す為に力を使い、飢餓状態に戻ってしまうだろう。

もしもお前が、血肉を喰いたいと感じ始めたら……それ以上は戦うな、絶対にだ……！」

「俺たちの仲間は、さっき会った善逸と伊之助の他にもう一人、柱の宇髄天元さんだ。白い髪で背が高くて、左眼の周りに化粧をしているから、すぐに分かるはずだ」

「んだこのボムボムしたやつ!?近づけねぇぞ!!」

「……禰豆子ちゃんの手前、カッコつけて迷わず引き受けたけどさあ!?助太刀!?ムリムリ!!今度こそホントに死んじゃうよぉお!!!」

「じゃあオマエ今すぐ寝ろ!!」

「こんなとこで寝たら死ぬだろ!?バカなの!?」

「寝れねぇなら代わりに絞め落としてやるぜ!!」

「話通じてないんですけど!?」

「ボンボンしてたのが止んだな……行くぞコラ!!」

「いやあああ!!」

「こうしている今も、俺たちはジワジワ勝ってるんだよなああ」
「それはどうかな!?」
攻撃が止んだのを見計らって、伊之助は声高らかに現れる。
後ろに、震える善逸を連れ立って……
「俺たちを忘れちゃいけねぇぜ!!」
「忘れててほしい、死にたくない……!」
さらに続けて炭治郎と禰豆子が、宇髄の前に降り立った。

「――何で妹まで連れて来てんだ!?」
「何で禰豆子ちゃん連れて来ちゃったんだよ!?」
「私も戦います……!」
「戦える!?さっきまで暴れ散らかしてたお前が……」
違和感の正体に、宇髄はすぐに気付く。

「……おい待て竈門禰豆子、お前何で普通に喋ってんだ？」
その質問に、炭治郎が代わりに答えた。
「……宇髄さん、善逸が禰豆子に血をくれました。おかげで今は落ち着いています」
「善逸テメェ!?鬼にエサやってどうすんだコラ!?脳みそ爆発してんのか!?」
「そんな言い方ないでしょォ!?禰豆子ちゃんに失礼でしょうがあ!!!」
「うるせえなあ……何人来たって、幸せな未来なんて待ってねえからなあ」
（こっちの人が宇髄さん、そしてあっちは……鬼……！）
「竈門禰豆子、来ちまったもんは仕方ねえ……ただし次はねぇぞ……？」
「……はい……！」
「……さて、勝つぞお前らァ!!」
「勝てないわよ！頼みの綱の柱も毒にやられてちゃあね！」
「余裕で勝つわボケ雑魚がァ！」
「こいつらは三人とも、優秀な俺の継子だ！逃げねぇ根性がある！」
「フハハ！まぁな！」

「今すぐ逃げ出したい……!!」
「妹の方も、人を食わねえ根性がある!」
「そしてテメェらの倒し方は俺が看破した!同時に首を斬ることだ、そうだろ!?」
「分かったところで、意味ねえよなあ」
「そうよ!夜が明けるまで生きてた奴はいないわ!長い《夜》はいつもアタシたちを味方するから!だからまずは……」

「裏切り鬼の分際で、アタシを散々痛めつけてくれたアンタからよ!!」
「っ!!」
　伸びてくる帯を、禰豆子は後ろに飛び退いて躱す。
（身体が軽い……これが鬼の身体……）
「逃がさないわよ!」
「禰豆子!」
　思わず飛び出しかけた炭治郎だったが、自制する。
（間違いなく、こっちの男の方が強い……!宇髄さんは毒を食らっている、ここは俺がやらなければ……!向こうは禰豆子を信じるんだ……!）

「二人とも、禰豆子を頼む!!」
（思えば、禰豆子と言い合いになったことなんて、ほとんどなかった……禰豆子の本音を……俺は……負けるわけにはいかない！）

「動きも遅い、力も弱い……拍子抜けね。さっきのは何だったの？まぐれかしら？」
屋根の上、長く伸びた帯に巻かれて、禰豆子は全身を締め付けられている。
「返り血を浴びてまた燃やされたら堪らないし、距離をとったままバラバラにしてあげる」
巻き付いているのとは別の帯が、鋭く伸びていく。
「――禰豆子ちゃん!!」
落雷のような音が響き渡り、伸びた帯が切り裂かれた。
「禰豆子ちゃん……！」
「……すみません……」

禰豆子は、左足の膝から先を切り落とされていた。傷口がミシミシと異様な音を立てている。
「さっきに比べて再生が遅いじゃない、アンタもう力を使い果たしたの？」
「そっちの不細工でも食って回復すれば？まあアタシだったら絶対イヤだけど、不細工だし」
「禰豆子ちゃんは、そんなことはしない……！」
「お前は黙ってろ、不細工が私に話しかけていいとでも？（コイツ……刀を抜いて、また鞘に納めてる……？）」
善逸は構えたままで、堕姫の目を見た。
「何？その目？またその目……あの時と同じね、怖くて震えてるくせに、見栄張って庇って……みっともないわね」
「ね、禰豆子ちゃんに……そ、それと、怪我させたあの子にも、……あああ謝れ……！謝れよ！」
堕姫は何も答えない。
「――親分を置いてくんじゃねえ!!」
伊之助が合流して、刀を構える。

前触れもなく、堕姫の額が割れて、目が現れた。
「どいつもこいつも……さっさと死になさいよー」
宙を漂う帯が速さを増して襲いかかり、さらに続けて、どこからともなく血の刃が飛んでくる。
絶え間ない攻撃を避けるのに必死で、三人は反撃に転ずることができない。
堕姫に近づくほどに攻撃の密度が上がる中、堕姫からの距離は近い順に、伊之助、善逸、禰豆子となっていた。

「特に血の刃はやべぇ!!掠っただけでも死ぬってのを肌で感じるぜ!」
言うや否や、刃が禰豆子を掠める。肩をザックリと切られた彼女は、さらに距離をとった。
「大丈夫か!?」
「禰豆子ちゃん!?」
「……はい!」
(毒があるといっても、私にはあまり効かないみたい……それでも、これ以上傷を受けるわけには……!)

「死ぬ!!死ぬ!!嫌ぁあああ!」
「オイ!?」
（紋壱（もんいち）のヤツ、起きたまんまだからか、ビビってうまく動けてねえぞ……!いも子も攻撃を見切れてねえ……!クソ!!どうする!?）
（遠い、近づけない……!このままじゃ私、足手まといだ……!）

――禰豆子が突然、真っ直ぐ駆け出した。
前の二人を追い越して、堕姫に向かっていく。
「禰豆子ちゃん!?」
「オイどうした!?危ねえぞ!?」

「ど素人のアンタが、術も使わずに何のつもりよ!?」
大量の帯が禰豆子に迫る。
――不意に禰豆子の身体が小さく縮んだ。
そのまま、隙間を縫うように近づいていく。
「（子供の姿?攻撃が当たらない……）ちょこまかとウザったいわね!!」

血の刃を飛んで避けた瞬間、その一瞬、帯の攻撃が禰豆子に集中する。
「俺たちも行くしかねえ！」
「禰豆子ちゃぁぁあん!!!」
伸びきってから折り返して禰豆子を狙う帯を、二人が叩き切る。
禰豆子はその援護を受けて、ギリギリで相手の懐に潜り込んだ。
「そんな小さな足で蹴るつもり!?笑わせないで!!」

「――血鬼術、爆血!!」

三話

「血鬼術、爆血！」
　禰豆子の両手から、煌めく紅い炎が吹き出す。
「また火が……！いや……嫌ァァァ!!」
「……ふざけるなよ……!!炎に焼かれた程度じゃあ、鬼は死なねぇよなあああ!?」
　泣き叫ぶ声の直後に、堕姫の口から二重に重なって不気味な声が響いた。
　不意に伸びた帯が禰豆子の腹に刺さる。返り血が付いて燃える帯は、それでも止まらず、彼女を屋根から突き飛ばした。さらにそのまま、後ろの善逸と伊之助に向かって伸びていく。
「禰豆子ちゃ――ああ!?」
「クソッ！せっかく近づけたのによォ!!」
「……炎の勢いが弱いわ、すぐに治ったもの。やっぱり返り血を浴びせなきゃ強い炎を出せないのね。それに……帯が一つ程度燃えたって、大したことないのよ!!」
　勢いを取り戻した帯の猛攻に、二人はじりじりと屋根の端へ押し返されていく。

「――宇髄さん!!」
「危ねえぞオオ!!」
　ついには、屋根の上にいた炭治郎と雛鶴の元まで帯が伸びていた。
「伊之助！善逸！禰豆子は!?」
「ふっ飛ばされちまった、だが見に行く余裕がねえ！」
「そんな……！」

　一方、屋根から突き落とされた禰豆子は、小さい姿のままで腹部を押さえてフラフラと立ち上がる。
（……痛い……お母さん、痛いよ……）
（お腹が空いた……喉が渇いた……）
（血の匂い……私の血じゃない、少し離れたところから……）
（あれ、おかしいな……？私はお兄ちゃんみたいに、鼻が利くわけじゃないはずなのに……）
（お兄ちゃん……そうだ、お兄ちゃんの血の匂いだ……お母さん、お父さん、お兄ちゃんが怪我してる……）
（でも、なんで分かったんだろう……？）

（……）

彼女の姿が、元の大きさに戻っていく。

「そうだ……まだ戦える……私、行かなきゃ……お兄ちゃん！」

「この鬼の首は柔らかすぎて斬れない！相当な速度か、複数の方向から斬らなくちゃ駄目だ！」

「複数の方向なら二刀流の俺様に任せとけ！」

「わかった！善逸、伊之助を守ろう！」

「無理!!」

「善逸!!!」

「うわぁぁぁぁ!!」

獣の呼吸　捌ノ型　爆裂猛進!!

水の呼吸　参ノ型　流流舞い!!

雷の呼吸　壱ノ型　霹靂一閃・三連!!

真っ直ぐ敵に向かっていく伊之助を、二人が援護する。しかし、全てを叩き落とすことはできなかった。

伊之助へと、横から帯が迫る。

（駄目だ、全然足りない……!!最低だ、伊之助ごめん……炭治郎……こんな俺を信じてくれたのに……!）

（……死ぬなら俺一人で死ねばよかったのに。最後まで臆病で、自分のせいで仲間を……）

「――ううっ……!!」

捌(さば)ききれなかった帯を、突然現れた禰豆子が受け止めようと飛び込む。帯はその身体を貫通したが、僅かに方向が伊之助から逸れた。

次の帯が左右から迫る。

右側にいた炭治郎が、それを受け流そうと動く瞬間、叫んだ。
「善逸!!」
「――っ!!」
再び踏み込んだ善逸が、一瞬で距離を詰めて左側の帯を斬り落とす。

「うおおおお!!!」
陸ノ牙　乱杭咬み!!

「首斬ったぞ!!向こうは!?同時だろ同時!?オッサンはどうだ!?先斬って良かったのかコレ!?」
「禰豆子……!」
「禰豆子ちゃん……!」
「オイ聞いてんのか!?」
二人は禰豆子へ駆け寄ろうとするが、首を失った堕姫の身体が動き、帯の攻撃が邪魔

をする。
「禰豆子……！大丈夫か……!?」
「禰豆子ちゃん、ごめん……！俺のせいで……」
「っ……ハァハァ……私のことはいい……から……！早く……!!」
禰豆子は息が荒く、傷口を押さえたままうずくまっている。
「まだ動きやがるのか気色悪い!!とりあえず首持ってくぞ!?」
斬った首を抱えて、伊之助が走り出す。
その身体を、鋭い刃が貫いた。
「伊之助ーーッ!!」
信じられない光景を目の当たりにして、炭治郎の動きが一瞬止まってしまう。
「お兄ちゃん危ない!!」
起き上がっていた禰豆子が、炭治郎を突き飛ばす。
直後、屋根が崩れ落ちた。

四話

『人を傷つける鬼を許すな！』
（鬼は……敵……！私は……私は……!!）

「禰豆子……」

建物の倒壊から免れた炭治郎は、起き上がって周囲を見回す。そして、少し離れた場所にその姿を見つけた。

「禰豆子！大丈夫か!?」
「――っ来ないで!!」

「ハァハァ……!!近づか……ないで……!!」

禰豆子の瞳孔は鋭く縦に切れ、肩で激しく息をしている。落ち着かせるためなのか、彼女は自らの着物の袖を強く噛み締めた。

「――なぁお前……あの鬼の娘、血縁だろ……？」

「ッ……!!」

「姉か？妹か？」

動けない様子の炭治郎は、逆らうこともできずに質問に答えるしかなかった。

「……妹だ」

「ひひひっ!!やっぱりそうか!!みっともねぇなあお前!!妹を守れずに、逆に庇われて怪我させてよお!!」

禰豆子はうずくまったままで、動ける状態ではない。妓夫太郎は禰豆子に目もくれ

ず、炭治郎へと話を続ける。

「でも仕方ねぇか……鬼は怪我したって治るからなあ？人間と違って……なあ!?」

ボキィ!!

これ見よがしに指を折ってみせる。炭治郎は一瞬身を固くするが、うめき声ひとつ上げずに黙ったままだ。

「それに……妹があんなに苦しんでるってのに、兄貴であるお前は何もしてやれないもんなあ!?本当にみっともないぜ!!」

「でもよ、なんだか愛着が湧くなあ……」

「まだお前にも、妹の為にしてやれることがあるぜ？なあ？」

「食いモン用意してやるんだよ、兄貴のお前が！でも、自分が妹に喰われるなんて言うなよ!?一回あげてそれっきりじゃあ意味ねぇからなあ!!お前自信が強くならなきゃあ守ってやれねぇ、当然だろ!?」

「お前も鬼になればいい。鬼になれば一瞬で強くなれる……さあどうする!?でなきゃ妹

もろともブチ殺すぞ!!」

「俺は……俺は……」

「お兄ちゃん!!」

「ちょっと嘘でしょ!?そんな奴に頸斬られないでよ!!」

刀に力を込める炭治郎に向けて、帯が伸びる。

その帯を激しい炎が包み込んだ。

「しつこいのよ!!クソ!!」

「ううぅぁあ!!」

今にも暴れ出しそうな禰豆子が、必死の形相で堕姫の方を向く。

（鬼は敵……!お兄ちゃんを守る……私は……!）

（もう耐えられない!!血を、肉を!!なんで我慢しなきゃいけないの!?どうして!?だって私は!!）

――禰豆子の眼前に、放り投げられた何かが転がってきた。

「柱様の特上肉、有り難く貰っとけェ！」

彼女は転がってきた左手を無造作に拾い上げ、むさぼるように口にする。

「譜面が完成した！勝ちに行くぞォ!!」

「そんな量の肉じゃ、大して回復できないでしょ!!それに忘れたの!?アンタじゃ頸は切れないのよ!!」

禰豆子に向けて堕姫は再び攻撃を仕掛ける。

しかし、禰豆子は堕姫の方ではなく別の方向へ駆け出した。

（建物が崩れる前、すぐ近くにいた……きっとこの辺りに……!!）

「――善逸さん！どこですか!?」
「……禰豆子ちゃん……!?」
禰豆子は声を頼りに、力任せにガレキを蹴り飛ばした。その背中に帯の攻撃が迫る。
「――霹靂一閃!!」
「チィッ!!今さら役立たずを引っ張り出したって、意味ないのよ!!」

雷の呼吸　壱の型　霹靂一閃
――神速!!

目にも留まらぬ速さで、善逸の刀が堕姫の頸を捉える。
「――アンタがアタシの頸を斬るより早く、アタシがアンタを細切れにするわ！」

「善逸さん!!」
禰豆子では、善逸の速さに追いつくことはできない。
彼女の視線の先で、帯が善逸の周りを囲んだそのとき……突然帯がバラバラに切り裂かれた。

反対側から現れた伊之助が、そのまま頸に刃を向ける。鬼気迫る勢いと共に、二人はついに堕姫の首を斬り飛ばした。

「――向こうは……お兄ちゃんは!?」

達成感に浸る間もなく、禰豆子は兄の姿を探す。

彼女が屋根へと飛び乗ったその時、辺りに声が響き渡る。

「まだだ！竈門!!逃げろォオ!!」

「お兄ちゃん!!!」

（遠い、間に合わない……！）

首のない鬼の肉体から、血の刃が湧き出てくる。

一瞬のはずのその時間は、禰豆子にとって不思議なほどに長く感じられた。

彼女の脳裏に様々な記憶が蘇り、うつっては消えていく。

『禰豆子……』
『禰豆子！』
『姉ちゃん！』
『禰豆子、お願いね』
（お母さん……お父さん……！間に合わない、誰か……！）
『諦めるな！』

『いいか善逸、壱の型は足が全て!!足の先の筋肉、血管の一つ一つに至るまで意識を割くんじゃ！』

雷が落ちたかのような轟音と共に、禰豆子は飛び出した。
彼女が手を伸ばすと、紅い炎が炭治郎の身体を覆うように広がっていく。

「お兄ちゃん……！お兄ちゃん……！」
「禰豆子……」

「他の皆は!?」
「動いちゃダメ！まだ傷が……！」
　立ち上がった炭治郎だったが、すぐに膝をついてしまう。
「何があった……？禰豆子……何で俺は……」

「炭治郎……！禰豆子ちゃん……！誰か……誰か来てぇ!!」
「……善逸の声だ、向こうから……！」
「待って、私に任せて！」
　炭治郎を軽々と背負い、禰豆子は走り出した。
　声のする方へ向かうと、善逸がガレキの山に手を掛けて倒れていた。
「善逸！無事か!?大丈夫なのか!?」
「たんじろお……足が痛くて登れないよお……伊之助がこの上に……心臓の音がどんど

ん小さくなってくよお……」
「そんな……！」

「伊之助、伊之助!!」
　伊之助の呼吸は浅く、心音も消え入りそうなほどに弱々しい。炭治郎の呼びかけにも応える様子がない。

「毒をどうにかしないと……でもどうすれば……！」
「何で俺は助かった……？俺も毒をくらったのに……」

「……もしかして……」
　隣にいた禰豆子が、優しく手を伸ばした。その身体を炎が包み込み、毒に侵された皮膚の色が元に戻っていく。

「腹減った！なんか食わせろ！」
「伊之助！」
「……良かった……！」

「禰豆子……！」
「うん、急がないと！」

炭治郎の案内もあって、その場所はすぐに見つかった。
宇髄を囲んで騒ぎ立てる三人に、禰豆子が割って入る。
「すみません、ちょっと失礼します」
宇髄の身体が炎に包まれる。
「ぎゃあああ!?何するんですかあ!?」
「落ち着いて、大丈夫ですから！」
「いやよく見たら鬼じゃないですかあなたぁ!?いやあああ!?」

「待て……こりゃ一体どういうことだ……？毒が消えた……」

「ええと……私もよくわかってないんです……」

「おそらく、禰豆子の血鬼術が鬼の毒を燃やしたんだと思います。以前にも他の鬼の術を解いてくれたことがあって……でも傷が治るわけではないので、もう動かないでください」

「いやいやお前も動くなよ、死ぬぞ」

「その通りだよお兄ちゃん、もっと自分のことも……」

「待て待てお前もだ竈門禰豆子、さっきまた理性飛びかけてたろ」

「……おかげで今は落ち着いています。……ええと、その……ありがとうございました……」

「宇髄さん、念のため俺は鬼の首を探してきます。確認するまではまだ安心できない。……禰豆子、頼む」

「……うん」

炭治郎の鼻を頼りに首を探しに出た二人。匂いを辿る途中、鬼の血だまりを発見し、血を採取する。

「珠世さんの所へ頼んだぞ」

（珠世さん、それにあの猫ちゃん……なんとなく覚えてる……）

「禰豆子、こっちに行ってくれ」

「鬼の匂いが強くなってきた」

「……うん」

鬼になった禰豆子は、人間だったころよりも感覚が鋭くなっていた。炭治郎ほどではないが、特に血の匂いには敏感となっている。

進むにつれて、言い争うような声が聞こえてきた。禰豆子は炭治郎を背負ったまま声の方へと急ぐ。

二人が近づいても、その言い争いがとまることはなかった。

「なんで助けてくれなかったの!?」

「俺は柱を相手にしてたんだぞ！」
「だから何よ!!」
「お前こそ上弦だって名乗るならなぁ！大して強くもねえ鬼の小娘に手こずってんじゃねえよ!!」
　お互いを罵倒する言葉は、激しさを増していく。
「……アンタみたいに醜い奴が、アタシの兄妹なわけないわ!!アンタなんかとはきっと血も繋がってないわよ!!」
「ふざけんじゃねえぞ!!お前一人だったらとっくに死んでる!!どれだけ俺に助けられた!?」

「――だめだ……」
「――お兄ちゃん……？」

「お前さえいなけりゃ、俺の人生はもっと違ってた！」
「お前なんか生まれてこなけりゃ良かっ――」

「――嘘だよ」
「本当はそんなこと思ってないよ」
「この世でたった二人の兄妹なんだから」
「君たちの味方をしてくれる人なんていない、だからせめて二人だけは……お互いを罵り合ったら駄目だ」

静かにゆっくりと、首は灰になって崩れていく。
ついに二人の手の中で、完全に消えてしまった。

「仲直りできたかな？」
「……うん、きっと……」

（お兄ちゃんが鬼にも優しいのは、私も鬼だから？それとも……）

「善逸、伊之助……ありがとう……」
「よかったあああ生きてるよオオ……」
「ゴホッ……」

喜び抱き合う三人を、禰豆子は少し離れた所で見守っていた。

鬼殺隊隊士　竈門禰豆子編

五話

　室内に置かれた箱がひとりでに開き、中から小さな禰豆子が顔をのぞかせる。まだ眠たげな彼女は、目をこすりながらゆっくりと外の様子をうかがった。
「おはようございます、禰豆子さん。私のこと分かります？」
「……あ、あの……ええと……」
　困ったように部屋を見渡すと、部屋に置かれている金魚鉢が目に入った。
「あの金魚を見せてくれた……」
「ええ、覚えていてもらえて嬉しいです。改めまして、私は蟲柱の胡蝶しのぶといいます」
「まずはこちらへ、病室に案内しますね」
　蟲柱・胡蝶しのぶが、禰豆子へと微笑みかける。帯刀したままのしのぶは、扉を開けて彼女を手招きをした。

「二人とも一命は取り留めました、まだ油断はできませんが……」
「お兄ちゃん……伊之助さん……」
ベッドの上で静かに眠る二人を心配そうに見つめる禰豆子だったが、何よりも生きていることに安堵した様子でもあった。

「そういえば、善逸さんと宇髄さんは……」
「善逸くんは、目覚めない二人と一緒だと気が滅入ってしまうので離れた別室に……宇髄さんは知りません、屋敷内のどっかに居ますよ」

再び自室に戻ったしのぶは、禰豆子の診察を始めた。
「あなたがこの蝶屋敷に運び込まれてから三日が経ち、その間ずっと眠り続けていました。推測では、血肉を喰らう代わりに眠ることで体力を回復していると……」
「禰豆子さん、今は空腹を感じていますか?」
「……いいえ」
「それは良かったです」

「どうしても我慢できない場合に誰かから血を分けてもらうか、それとも空腹になる前に定期的に血を摂取するか……それに、必要な血の量についても全く見当がつきません」
「とりあえず二、三日は様子を見ましょう。何か変わったことがありましたら、すぐに私に報告してくださいね？」
「はい、ありがとうございます」
「といっても、私に分かることは限られていますが……」
「鬼の体質については鬼殺隊の誰よりも詳しい自信がありますが、それはあくまで……」
　言いかけて、途中で口を閉ざす。
「……無神経が過ぎましたね、すみません」
「いえ、いいんです」

「――おーい、入るぞー」
　二人が振り返ると、その声の主は確認もとらずに部屋へと入ってくる。
「竈門禰豆子、一緒に来い」
「たった今伝令があった。俺の柱としての最後の任務だ」

「着いたぞ、起きてるか？」
「ここは……」
宇髄に背負われて長時間揺られた禰豆子は、とある屋敷の縁側で再び目を覚ました。庭に面したその部屋は広く、日陰になっている。
「来てくれてありがとう、天元、禰豆子」
閉め切ったままの襖（ふすま）の先から、落ち着いた声がきこえてくる。
「御館様、こちらこそ、隊を辞退するお許しを下さりましたこと、心より感謝申し上げます」
「そんなに畏（かしこ）まらないでおくれ。君のお陰で、どれほどの人々が救われたことか……」

「ゴホッゴホッ……禰豆子、炭治郎が大変なときに呼び出してしまってすまない。しかしどうしても直接話がしたくてね」

「具合が良くないのなら、無理なさらない方が……」
「私のことはいいんだ、代わりはいくらでもいる。それに私と違って、君は貴重な存在だ」

「禰豆子、君を鬼殺隊の正式な隊士として迎え入れたい」
「今までは、人を襲わないことを条件に君の身柄が保証されていた。そして、提言した義勇、同行する炭治郎、二人の育手である鱗滝、この三人がその責任を負うことも含めてね」
「しかし、君が自我を取り戻したことで状況が変わった。鬼殺隊としては当然、鬼である君を自由にさせるわけにはいかないんだ」
「もちろん入隊は断ってくれてもいい。強制はしない。監視こそ付くが、生活は我々が保証するよ」
「それでも君が……炭治郎と同じように、鬼殺隊の一員として戦ってくれるのなら……」

「お願いします!!」
「……ありがとう」

「二人とも、もう下がっていいよ」
「隊服と日輪刀も支給する、詳しい話は後で鎹烏(かすがいがらす)を通じて――」
「か、刀!?え、ええと、私……」
「天元、後は頼んだよ」
「待って、もう少し――」
「下がれって言われたら下がれ、ほら帰るぞ!」

禰豆子を背負って蝶屋敷へと戻ってきた宇髄を、しのぶが出迎える。どこか冷ややかな態度の彼女は、用事が済んだら早く出ていけと宇髄に告げた。
「まあそう言うな、まだ完治してねえ。もう少し世話になる」
「……それは別に結構ですが、ひとつだけ言っておきます」

「今度うちの子たちに乱暴したら、食事に毒混ぜますから」
「毒は効かねえよ」
「……反省してます？」
「悪かった、マジで反省してる。あのときの俺は冷静じゃなかった、許してくれ」
「……はいはい」

話を終えて、宇髄が日陰に入って箱を下ろす。中から出てきた禰豆子に、しのぶが微笑みかけた。
「お待たせしてすみません……禰豆子さん、私が屋敷にいる間は屋敷内を一人で自由に歩き回ってもらって構いませんので」
「ありがとうございます」

そして数日後……

「私、こういうハイカラな服は初めてで……変じゃないですか？」
「全く問題ありません。完璧です」
　届いたその隊服は、上は普通のものと変わらないが、下は膝丈のスカートになっている。
「身体の大きさを変えることができると聞き、小さくなっても裾（すそ）が邪魔にならないように、短めにしてあります」
「そんなところまで……ありがとうございます！」
「気に入っていただけて何よりです。それでは、私はこれで……」
　禰豆子の隊服姿を見届けると、眼鏡を掛けたその隠はそそくさと屋敷を後にした。
　続けて、鉄穴森と名乗る人物が挨拶をする。

「さて、こちらがあなたの日輪刀になります」
「これを私が……」
　差し出されたそれは、刀というよりも包丁のような見た目だった。
「わざわざありがとうございます」
「いえいえ、作ったのは私ではなくて里長の鉄珍様でございます。あのお方、『おなごの刀はワシが作る！』と言って勝手に始めてしまいまして……」

「剣士としての修行をなされていない関係で、鬼としての腕力を活かして叩き斬るためにとにかく頑丈に拵えたとのことです」
「それと……鬼であるあなたが、日輪刀を持ち歩く危険性について……」
「ご存知かと思いますが、鬼を滅することができるのは太陽の光と、日輪刀で首を斬ることのみ……日輪刀こそが、鬼殺隊の隊士である証なのです」
「鬼との戦いで、ひとたび相手に奪われてしまえば……鬼であるあなた自身に牙を剥くやもしれません。重々承知の上で、取り扱いにはご注意下さい」

おまけ

「お兄ちゃん……伊之助さん……？（……被り物とった姿、初めて見た……）」
「禰豆子さん、その隊服……普通のものに替えてもらうこともできますよ……？」
「いえいえそんな……この服は私のために心を込めて作ってくださったものなので、

とっても気に入っています！」
「そ、そうですか……（カナヲといい蜜璃さんといい、着てみたら意外と平気なんでしょうか？）」

日輪刀が出来上がるまでの日数について
原作では十五日ぐらいかかると明言されてますが、今回禰豆子に用意されたものは繊細な日本刀ではなく無骨な短刀で、そのうえ禰豆子に入隊するか訊く前に既に作り始めていたので、そんなにかからず届きました。ちなみに刀の色は変わっていません。